



TITLE:

小樽支部より

AUTHOR(S):

CITATION:

小樽支部より. 天界 1934, 14(160): 399-400

ISSUE DATE:

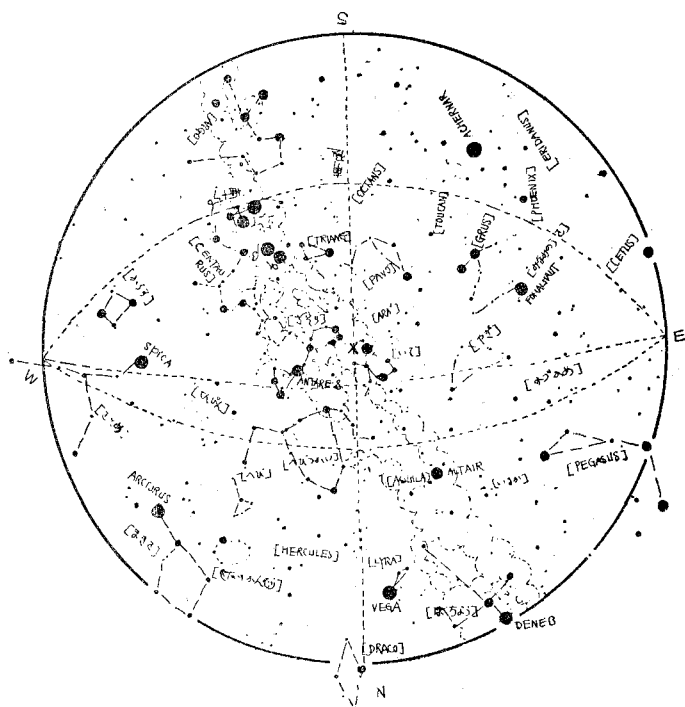
1934-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166851>

RIGHT:

IV.—八月の南天星座

(南緯 30° の土地にて見る)

小樽支部より

例會を3日午後7時から會員田中外科病院長方に於て開催致しました。仲々盛な集りで御座いました。

今月は前小樽中學校長の要職に居られ 天文學に精通せらるゝ清水實隆先生に御出席を願ひ、種々御高説を伺ふ事が出来ました事は吾々に取りまして嬉しい事で御座いました。併し残念な事は清水氏が折角御持参下さいました6種の屈折鏡を降雪の爲め使用出来なかつた事であります。

今回は主として火星に付いて色々の話がありました。最後に清水氏の明治29年の枝幸を通る皆既日食見物に行かれた當時のお話がありました。下に其

の概要を申し上げます。

明治29年8月9日枝幸を通る日食皆既の際に珍しい現象を観るべく厚岸に参りましたら、同地にて観測をなさる平山信博士の一行にお會ひ致しました。人員が不足だと云ふので寫眞撮影の助手の依頼を受け、共に従事しました。現今の撮影法は如何なるものか知らぬが、當時の撮影は一ツツツ撮影しては乾板を取外し、又取付ては寫すと云ふ様な、手数の掛るもので、乾板の取扱ひ一切は厚岸の寫眞屋に依頼し、自分はシャッターの係を命ぜられ、2,3日前から一ツ二ツ三ツ……60と數へては、時計と合せながら秒の讀み取りの練習をしましたが、早かつたり遅かつたりして、仲々うまく合はないので困りました。兎に角日食前日までにはどうやら合ふ様になり、前夜は種々準備を整へて床に入り、翌朝目を覺して戸外に出て見たら、一面に濃原な「ガス」(霧)なので、一同がつかりし、うらめし相に空を見詰めて居るばかりでありました。

併し、ガスは遂ひに去らず、観測は不結果に終わりましたが、食の時間に至りますと、太陽は見えませんが、四圍が段々暗黒となり、愈々皆既の時には暗黒は一層加り一間先位の物がぼんやり見える位で、何共云ひ知れない壯嚴な氣分に打たれました。折角期待して行つた日食を見る事が出来なかつたのは残念でありました。當時の記念の寫眞が有りますので、枝幸の圖書館に寄附し様と思つて居ります。併しました2年後に同地方で起る日食の際には是非又出掛け様と思つて居ります。」

明治43年に、ハレ1彗星出現致しました時、別個な大彗星を見た話が清水氏及稻垣氏から承りました。

ハレ1彗星出現の年の1月、西天に頭部を下に尾を逆出た彗星が忽然と現はれたるを、清水氏は札幌方面を通過の汽車の窓から、稻垣氏は小樽にて見たる由。尚稻垣氏は翌晩も西天を注意して見ると、最早やかすかに小さく見えたるのみにて、當時の新聞紙等には何等記事が出なかつた由。以上